(『国語学』178集　1994・9・30)

「音韻史の展開——音節構造の変遷——」総括

早田輝洋・添田建治郎

このセッションでは、史的音韻論の諸問題の中から、(一)日本語の音節構造は、シラブル(シラビーム)あるいはモーラとして歴史的に如何に把握されるべきか、(二)東、西両方言の差の形成過程は、音便現象・指定の助辞・アクセント等々を指標にどのように説明し得るか、この二つを取り上げた。前者の(一)は音節構造の通時論で窪薗晴夫・木田章義の両氏が論ぜられ、柳田征司氏の年来の研究もこれに関わる。その柳田氏は共時論として(二)の中世の音節構造を扱われた。

早田の基調報告(「日本語の音節」)は上記の課題を次のように整理した。

(一)CV音節とCVV, CVC音節の音韻論的な区別のない言語は極めて例外的なので、上代日本語の音節構造がCVだけだというのは疑ってしかるべきである。(二)長さ(あるいは、重さ)の単位とリズムの単位とは厳に区別すべきである。長さ(重さ)の単位であるモーラと音節(シラブル、シラビーム)とは区別する必要があり、ともに重要な単位である。(三)CV音節よりCVV, CVC音節が物理的にどのように長くても、CV音節を一と数え、CVV, CVC音節を二と数える「音韻規則」が当該言語、方言になければ、それぞれ一モーラ、二モーラとは言えない。

続いて、窪薗氏が「音節量の観点からみた音節構造の変遷」と題し次のように説かれた。

(一)音節(シラブル、シラビーム)と長さ(重さ)の単位であるモーラは区別すべきである。それにより様々な言語現象が説明される。(二)世界の言語一般に言えることは、軽音節(一モーラ音節)と超重音節(三モーラ音節)は、通時的にも共時的にも重音節(二モーラ音節)になる傾向がある。日本語の音韻史にもそれが見られ、音便現象はまさに軽音節の重音節化である。ただ、上代語における母音の融合・脱落は、重音節を軽音節にするもので奇異である。—(この点については、上代語の(軽)音節が音声的には長かった(従って超重音節を嫌った)からだろう、という声が散会後も聞かれた。)

更に、木田氏の「日本語の音節構造の歴史」も、同様の課題につ

いて次のように論ずる。

万葉集の字余りは歌のリズム・朗詠の問題であり、母音の融合・脱落や連声現象も日本語がモーラ構造だったが故の現象と捉える。それにより、古代の日本語はモーラ構造をもち「粒の揃った音節」が並んでいたと考える。その後、「長音、促音、撥音、連母音」が発生してきたが、それら特殊音の受容に際しては方言により二種類の異なる処理法が採られた。

① 特殊音を独立安定させて、モーラ(等時拍)の資格を与える。
⇩中央方言などが採った手法

② 特殊音の多くを短縮して前の音節に付随させ、一音節の中に取り込む。
⇩北奥方言などが採った手法

中央方言と北奥方言では「音節の処理の仕方が異なるだけで、リズム単位としてのモーラは共通していた」のである。従って、所謂シラビーム方言(A)とモーラ方言(B)が見せる「ABA型分布」は、「広く全国を覆っていたAが、新しく中心部に成ったBによって分割され、周辺に分布したもの」とは考えられない。この木田氏の説に従って言えば、北奥方言が主に採った②の処理法は、中央方言にも「筆、札、文箱、鳥冠、喉…」等々古く見出すことができるものである。

柳田氏の「母音優位・子音優位」は、主に、ハ行四段連用形の音便や指定の助辞「ダ、ヂャ」の成立、「二拍第二類動詞連用形+テ(音便形)」アクセントの変化時期などを手がかりに、東、西両方言に差が生じた理由を、体系的類推性や特定の音声環境(音便形)におけるアクセントの頭高型化に着目して説き、従来の解釈「基層語としての子音優位と母音優位という発音傾向の違いによる」説を排した。自説の利点の一に「東西の方言差が生じた時期」についての合理的な説明が可能な点を強調される。左に論拠の一例を挙げる。

オ段開合の区別の混乱は、ハ行四段動詞連用形について「西部方言がウ音便専用／東部方言は促音便・ウ音便併用」だった室町時代末期頃に生じた。この混乱によってウ音便形は語幹が動揺し具合が悪いことになった。この際に、促音便とウ音便を併用していた東部方言では、語幹保持をめざしてウ音便形の方を捨て「促音便専用」となった。一方の西部方言では、採るべき促音便が既になく「ウ音便専用」となった。かくして、東西方言におけるハ行四段動詞連用形の音便現象の差が際立つことになった。

発表者間の議論の概要

窪薗、木田、柳田三氏のうち、窪薗氏のみが(および早田も)シラブル(シラビームでも)とモーラの区別を認めるのに対し、木田、柳田の両氏はその区別を認めず、木田氏はすべてをモーラと考えてよいとされた。少なくともモーラの方が重要である、という。木田氏はモーラをリズムの単位と考え、窪薗氏はモーラを長さの単位とされた。

窪薗氏としては(早田も同意見であるが)、「木田氏のようにモーラをリズムの単位とすると、長さ(むしろ窪薗氏の言い方ではもう一歩抽象化して、重さ)の単位で区別できる諸方言・諸言語の類型論的区別がすべて出来なくなる。CV音節もCVV音節もCVC音節も等しくリズム上一単位となる英語と日本語鹿児島市方言が、同一のモーラ

構造をなすことになってしまう。このようにリズム上は英語も鹿児島市方言も同じであるが、アクセントの位置を決定する規則では、英語ではCVは一単位（軽音節）、CVV, CVCは二単位（重音節）であるのに対し、鹿児島市方言ではアクセント上もCV, CVV, CVCは同じく一単位である。リズムの単位のみで律するとこのような大きな違いも無視することになる。」と考えられた。また、鹿児島市方言で、外来語らしい外来語トロンボーンは、窪薗氏の内省では、トロンボーン、もっと方言的にトロンボンと言えばトロンボンとなる。この事実に対する「説明」は、ボーンは東京方言的に二単位に数える音節、ボンは一単位に数える音節としてこそ可能なのである。一モーラ音節＝軽音節と二モーラ音節＝重音節（さらに三モーラ音節＝超重音節）の区別、すなわち長さの単位であるモーラと音節（シラブル、シラビーム）の両方が必要な所以だとの主張である。

リズムの単位をモーラと規定すると、世界中のすべての言語にリズムが有るであろうから、すべての言語がモーラを有し、モーラ構造を有し、従ってモーラ言語だと解されることになり、その点にも問題が残る。

会場から出された意見、そのほか

＊長音は、その短音と対立するモーラとしての成立は新しく、しかも、常に長音に実現するとはかぎらない、言わば「半人前」の特殊音である故、長音における「重音節化」を促音、撥音と同じレベルで論ずることはできないはずだ。

＊日本語が重音節を好むのなら、何故古くは軽音節構造だったのか。現在の日本語の一拍は0.13～0.15秒の長さで発音され、リズムの単位としては短かすぎる。二拍（重音節）だと、0.3～0.4秒になり人間のもつ歩行、拍手などのリズムの範囲内（0.4～0.6秒）に入る。上代日本語は一拍の長さが少し長かったのではないか。

＊古代日本語の音節構造を考える場合、日常語（表記せられたもの）の母音連続形を歌謡とは異なったどのような方法で一単位（CVと同じ長さ、例えば「nia」（ニアリ）、二単位（同じく「nia」）と認定するのかなど、歌謡と日常語の母音連接形の関係、字余りの意味（リズム・朗詠の問題に限定してよいか）について慎重な吟味が必要である。

論議に十分な時間を割き得なかった前記の柳田氏の発表に一言触れておきたい。下記の方言事象での符合は氏の所論へどのように関わってくるのだろうか。つまり、先学の報告によれば、東日本方言の中には、「オ段開合の区別」と「ハ行四段動詞連用形におけるウ音便（厳密には長音便）・促音便の併用」、二つの現象がほぼ重なって併存する地域が「新潟県の中越・南越とその周辺ほか、佐渡地方、愛知県三河地方の一部、埼玉県東部地方の一部」などに見られるのである。これに対し、同じ東日本方言でも早くにオ段開合の区別を失った多くの方言では、促音便が専用されている。これは柳田氏説の出発点として興味深い。

また、アクセントをも有力な論拠にするためには、取り上げられた二拍二類動詞連用形（音便形）における頭高型化と、「アクセントの山がうしろにずれる」変化との関連性などにもメスを入れる必要があるかと思う。

まとめ

国語学者は言語学者の言うことがよく理解できず、言語学者は国語学者の言うことがよく理解できない。あるいは互いに理解したつもりで誤解している。同じ術語を用いても意味が違うし、考え方の前提が違う。これは、両者の受けてきた教育の違いによるものと考えられる。若い世代の学者にはそんなことは少ないかもしれないが、今回の発表ではそれが痛切に感じられた。司会の不手際もあり、疑点を完全に糺す暇も、興味ある議論を深める時間も無かったのは残念であったが、国語学と言語学とのコミュニケーションをよくするという意味では極めて有意義な企画だったと思う。互いの立論への理解が深まり、嚙み合った論争が期待できよう。同じ道を志す者として切磋琢磨していきたい。

最後に、北海道大学関係者や発表者、ご来場の諸氏に心から感謝の意を表する。

――早田・大東文化大学教授――
――添田・山口大学教授――